

平成 22 年度 長野県視聴覚放送教育研究大会

更埴・長野南部大会研究授業

社会科学習指導案



指導者 長野県教育委員会東信教育事務所 指導主事 桐山 清一 先生

日時 平成 22 年 10 月 29 日 (金) 9 : 4 5 ~ 1 0 : 3 5 50 分授業

授業会場 南ホール

授業学級 3 年 4 組 (男子 17 名、女子 15 名、計 32 名)

単元名 公民的分野

「臓器移植 あなたはドナーになりますか ～自己決定権について考える～」

(全 6 時間中 第 6 時)

授業者 檀原 美江子 教諭

I	テーマ	1
II	テーマ設定の理由	1
III	研究の概要	2
IV	研究の仮説	3
V	本時の学習指導案	3
1	単元名・学年	3
2	単元設定の理由	3
3	単元の目標	3
4	単元の展開と評価計画	4
5	本時案	6
(1)	主眼	6
(2)	本時の位置	6
(3)	指導上の留意点	6
(4)	展開	6
(5)	実証の観点	7
VI	研究内容	7
1	本時にかかわる視聴覚教材とその活用方法	7
2	素材の教材化等	7
3	単元によせた教材化	8

千曲市立戸倉上山田中学校

I テーマ

社会的事象を身近に感じながら、自分の見方や考え方の深まりを実感できる社会科学学習
～ 電子黒板の効果的な活用を通して ～

II テーマ設定の理由

本校では「わかる授業 楽しい学校」を研究テーマにし、周囲の人やものに関わりながら自ら課題をもち、学ぶ意欲をもち続け、主体的な学習への取り組みを通して学んだことに成就感や達成感をもつことができる生徒の姿を具現しようと研究を進めている。社会科では、一つの社会的事象との出会いから感じた感想や疑問をもとに、生徒自らが課題意識をもち、社会的事象の背景（原因や仕組み）を探ったり、他の社会的事象と関連させたりして主体的な追究をし、多面的・多角的に考察することで、事実を正確にとらえようとする生徒の育成をねらいとしている。そのような授業を展開することで、生徒は「よし、わかった」、「今までは、〇〇と思っていたけれど、本当は〇〇だったのだ」、「〇〇ってすごいなあ」というような、学ぶよろこびを実感できると考えている。

地理的分野の学習、「アメリカ合衆国の農業」の特長を日本の農業と比較しながら考える場面（「多様なすがたをもつアメリカ・2学年」）では、生徒たちは最初、日本の農業は「お年寄りがやっている」「狭い土地でいろいろ作っている」、アメリカの農業は「広い土地でたくさん作っている」「日本とは違う農業のイメージがある」という考えをもっていた。その後、日本とアメリカの農業に関する比較資料（農業従事者数や穀物生産高、農業従事者一人あたりの生産高、耕地 100 h a 当たりの農業従事者数、玄米 60 k g の生産費など）をもとに、その違いや特長を真剣に考えていった。そして、「単一作物の大量生産」、「大型機械の導入」、「消毒や肥料などの散布」、「大量輸出」などの諸要素を関連付けながら、特長を見いだすことができた。そして、感想記入用紙に「日本と比べると、とてつもなく広い耕地でひとつの作物を栽培している」「とても広い農地だから、大きな機械が必要になるし、とても効率よく農作業を行っていることがわかった」「自分たちで食べるためではなく、外国に輸出するために商品として作物を大量に作っていることがわかった」と書いた。これらは 100 h a という耕地の規模が学校の校庭の何倍であるかを絵を使って表したり、アメリカの農業の写真や V T R を視聴したりすることによって、数値的な資料だけでなく、地図や写真という具体物を用いて資料提示したことで、生徒が身近な問題と感じながら学習することができたためではないかと考えられる。

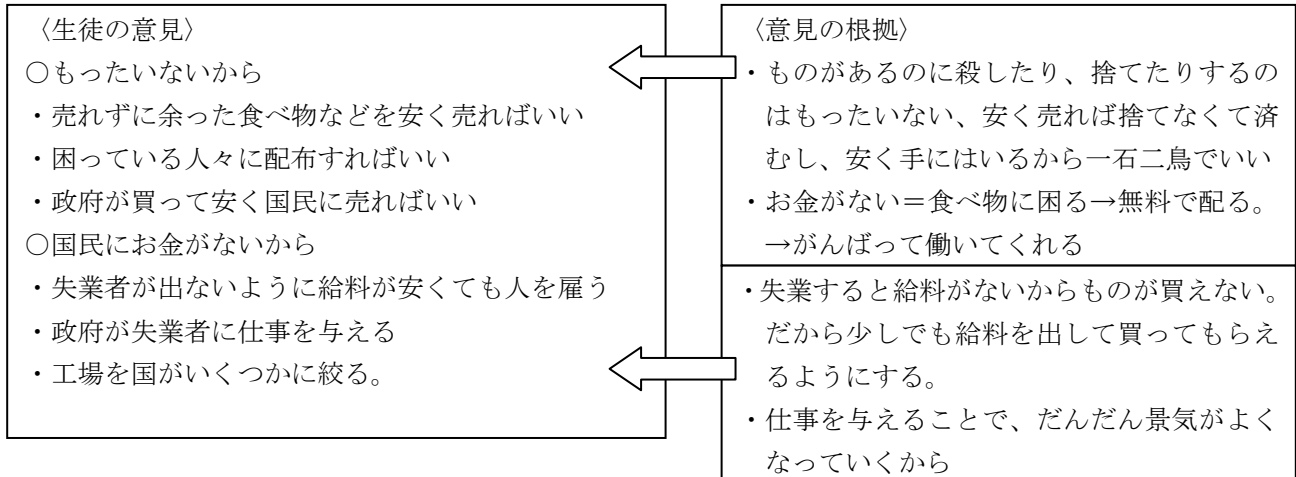
一方、生徒の中には社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を習得することだけに力を入れ、社会的出来事や社会科の用語、年代などを暗記することで満足してしまい、社会的事象に対する自分の考えをもつことができないでいる。3年生の総合テストの結果をみると、「〇〇は何か?」といった基礎的な知識を問う問題については、地理・歴史・公民の3分野ともに正答率が高いが、グラフや資料から読み取る問題（地理）、年代順の並べ替えなど、歴史的事象を関連付けて答える問題（歴史）、経済の仕組みにかかわる問題（公民）など思考力や判断力を問う問題の正答率は低い。このことからわかるように、既習の知識を活用したり、自分の考えをもち課題を探究しようとしたりしない姿が見られる。これは、これまでの社会科学学習を振り返ってみると、解説を中心に授業を展開してしまいがちで、出会った社会的事象の背景を探る、他の社会的事象と関連させる、「自分だったら・・・」という視点で追究する、生徒の意識に沿って様々な資料を提示する、といった場面が少なかったことに原因がある。

そこで、本時は人権学習の「新しい人権」の学習場面において、生徒が自ら課題意識をもって学習を進めることができるように、私たちの身近な存在になってきた「ドナーカード」をとりあげ、追究を進める中で、臓器移植について「もし、自分だったら」と自分によせて考えることで、社会的事象を身近に感じられる単元を構想する。また、生徒が調べてみたい事柄を調査・追究し、電子黒板を使って発表し、資料を的確に提示したり補ったりしながら、友と意見交換する場をつくることで、基礎的・基本的な知識を習得するだけでなく、生徒自身が自分の見方や考え方を広げたり深めたりしていけるようになると考え、本テーマを設定した。

Ⅲ 研究の概要（仮説を導き出した事例）

1 「もし自分がアメリカの大統領だったら」と世界恐慌に対する政策について主体的に追究していった生徒（平成 22 年 5 月「世界恐慌とブロック経済 アメリカのニューディール」・3 年）

歴史的分野の学習、「世界恐慌」の学習場面で、世界恐慌の影響で各国で起こった具体的な経済状況の学習の後、「もし、自分がアメリカの大統領だったら、どうこの難局を乗り切りますか？」という学習問題を考える場面。



また、普段なかなか自分の考えをもつことができず、友の考えを聞くだけになりがちな生徒が、「海の中へ捨てる」という考えを発表した。その考えの根拠を明らかにしたかった教師が「どうしてそう考えたの」と尋ねると「コストがかからないから」と答えた。学習してきた過程を振り返り、根拠をもって結論を導き出すことができた姿であるととらえた。

この授業を終えての生徒の感想

- ・アメリカの大統領になったらの話が盛り上がり、とても濃い授業でした。
- ・アメリカは国で会社を建てたり、私が思いつかないような政策を立てたんだなあと思いました。
- ・今日は経済の立て直しをやったけど、アメリカやヨーロッパはとても頭がいいと思いました。
- ・アメリカは労働者を保護したりして、ニューディール政策を行った内容が今日の授業でよくわかりました。

さらに次時で、生徒は「他の国は、日本はどうしたのだろうか？」といった疑問をもち、追究を深めていった。

これは、「もし自分だったら・・・」と学習問題を設定したことで、社会的事象を身近な問題としてとらえることができ、追究のエネルギーが持続できた姿である。また、直感や既存の経験でとらえていた自分の考えに、新たな見方や考え方を加わり、自分の考えを深めることができた姿である。

2 「なぜ、沖ノ鳥島の工事に 300 億円もかけたのか」について考える場面で自分の考えを深めていった生徒（平成 22 年 7 月「日本の領域」1 年）

地理的分野の「日本の領域」を学習する導入場面で、日本の最南端である沖ノ鳥島について、地図上で位置を確認し、昔の沖ノ鳥島の写真（岩に国旗が立っている写真）を提示した。そしてこの島に使われた工事費を伝え「この小さな島を守るために、なぜそんなにたくさんのお金を使ったんだろう」と学習問題を提示した。

生徒は昔の島の写真を見ながら「島がなくなれば日本の領土が減ってしまうからじゃないかな」という予想をもった。そして、その予想をもとにこの島をとりまく環境について調査学習を進めていった。調査学習の中で「経済水域」について知った生徒は、島の工事にお金をかけた背景に、この「経済水域」が関わっているのではないかと考えているようだった。その後、集めた資料をもとにグループごとに原稿を作り、調査活動を通してわかったことや考えたことを発表する場面を設けた。経済水域にふれて発表するグループの多くは、ことばや数字で説明しようとしていた。その中で、発表資料に 200 海里の経

済水域の範囲を示した自作の地図2枚（沖ノ鳥島がある場合の経済水域を示した地図となくなってしまう場合の経済水域を示した地図）を用意したグループがあったので、実物投影機を使い拡大して提示できるように支援した。その発表を見ていた生徒は授業の感想に「200 海里の経済水域の絵はわかりやすくよかったし、僕が考えたことと同じだと思った。沖ノ鳥島を 300 億円もかけて工事をした理由がよくわかった。」と記入した。教師はこの姿を、実物投影機に映し出された友の地図をもとに、自分の考えをより確かなものにしていった生徒の姿をとらえた。また、他の発表の中には工事の様子や現在の沖ノ鳥島の様子、政府のコメントをもとに考えを発表するグループがあった。その発表を見たり聞いたりしながら「なるほど」とうなずく生徒の姿があった。このような場を設けたことで、友の調べた内容や考えに出会い、様々な視点で社会的事象をとらえられることを知り、自分の考えを見つめ直すことでその考えを広げたり深めたりすることができたのではないかと考えた。なお、この授業では実物投影機を使い支援したが、発表の場を設けるにあたり様々な視聴覚機器のよさを生かしながら授業構想することで、より仮説に迫れるのではないかと考える。

IV 研究の仮説

- 1 「もし、自分が〇〇だったら」と自分によせて考えることを通して、社会的事象を身近に感じながら追究できるように単元展開を構想することで、課題意識をもって意欲的に追究することができるであろう。
- 2 自分たちの興味・関心に基づき調べ、習得した知識等を活用して、具体物・VTR・写真・電子黒板・パソコンなどの視聴覚機器や資料を使いながら、社会的事象についての説明をしたり、発表・意見交換をしたりする場面を設けることで、自分の見方や考え方を深めることができるだろう。

V 本時の学習指導案

1 単元名・学年

「臓器移植 あなたはドナーになりますか ～自己決定権について考える～」 3年(6時間扱い)

2 単元設定の理由

授業学級である3年4組は、興味・関心をもったことに対して意欲的に取り組もうとする生徒が多い。社会科の授業では、教材や資料を見て生まれた疑問に対し、日常生活や今までの授業で学習したことと結びつけながら、それはなぜなのか予想を立てて発表しようとする姿がみられた。

一方、積極的に発言する友の考えを聞くだけになっていたり、知識を取得することに力を入れたりするあまり、授業に対し受け身的な姿も見られる。そのため、自分の考えは持っているが、さまざまな角度から事象を考察できていないでいる生徒も多い。

そこで本単元では臓器移植の問題について考える。ドナーカード（臓器提供意思表示カード）を手にした生徒が、もし自分だったら臓器提供に賛成するだろうか（意思表示カード）という選択の場にぶつかり、疑問をもとに臓器移植をめぐる現状や意見について調査を行い、調査のまとめを電子黒板を利用して発表し合いながら、臓器提供についての自分の見方や考え方を広げたり深めたりしながらよりよい意思決定ができるようにすることにねらいをおいて行う。身近な問題として心を寄せながら、意欲的に追究しようとする生徒も多いだろう。また、自分の一面的な思いや考えで判断するのではなく、周囲の考えや事象の背景などを捉えて理解したとき見方や考え方が広がったり深まったりできるようになると考え、本単元を設定した。

3 単元の目標

(1) 社会事象への関心・意欲・態度

臓器移植をめぐる調査学習に意欲的に取り組み、自分の問題として関心をもって考えることができる。

(2) 社会的な思考・判断

臓器移植の問題について、ドナー、移植を待つ人、臓器移植の状況などさまざまな立場から多面的・

多角的にとらえながら、自己決定しようとすることができる。

(3) 資料活用の技能・表現

インターネットや資料集、新聞記事等を用いて調査し、資料を読み取ってポイントをまとめたり、ワークシートに自分の考えをまとめたりしながら、視聴覚機器を効果的に利用して説明することができる。

(4) 社会的事象についての知識・理解

自己決定権の意味を理解し、公正に判断しながら生活していくことの大切さに気づくことができる。

4 単元の展開(全6時間)と評価計画

過程	○学習活動 ・生徒の反応	◇指導 ◆評価	時	備考
事象との出会い	<p>○ 臓器移植について考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞やニュースで脳死の人の臓器提供に家族が同意したとよく聞くよ。 ・ドナーカードの実物を初めて見た。裏に提供する臓器を具体的に書くようになっているのか。 ・自分ならどうしようか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">もし自分だったらドナーになりますか。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・臓器移植法という法律があるのをしらなかった。もうすこし詳しく調べてみたいな。 ・ドナーカードを持つ必要があるのだろうか。持たなくても死んだ後のことだから関係ない。 ・なぜ、ドナーカードを持っていない人の臓器も移植できるようになったのだろう。 ・臓器移植について、どのような意見があるのだろうか。 ・日本や世界では臓器移植の状況はどうなっているのだろう。 	<p>◇臓器移植について知っていることを発表するよう促す。</p> <p>◇臓器移植法の改正により、15才未満も臓器提供ができるようになったこと、自分の意思を示していなくても、家族の同意があれば臓器提供ができることなどを伝え、学習問題「もしあなただったら脳死になったときドナーになりますか」という学習問題を提示し、自分だったらどうしたいかを問う。 ◆ア</p>	1	
／ 追究	<p>○グループに分かれて、テーマごとに調査活動を行い、発表に向けてまとめを作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臓器移植法がずいぶん変わってきた。改正されたポイントを端的にまとめに書こう。 ・アンケートはグラフにして分かりやすくまとめてみたい。 ・提供した側の思いや提供された側の思い、お医者さんの考えなどを直接インタビューしてみたい。 	<p>◇前時で「自分だったらドナーになりますか」を考える際に気になったことの内容が共通している生徒同士で小グループをつくり、調べ学習を進めるよう促す。調査した結果を、要点的にパワーポイントにまとめ、発表の準備をするよう促す。 ◆ウ</p> <p>◇調べ方で悩んでいるグループには、調べ方をいくつか提示することで、調べ学習を進められるよう支援する。</p>	3	インターネット・パソコン・電子黒板
／ まとめ	<p>○ 調査してきたことを発表し合い、自分の考えをふり返し発表し合いながら、自分の考えを深めていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本では、ドナーが圧倒的にたりない。どうしたらいいのか考えてしまう。自分が了承しても家族が反対する場合もある。自分だったらどうしよう。 	<p>◇グループ発表では、電子黒板をつかってポイントを示しながら説明するよう促す。発表を聞いて気になったことをメモできるようワークシートを用意する。 ◆ウ</p> <p>◇他のグループの発表を聞いて、臓器提</p>	1	プロジェクト

	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思ではない場で決められるのはいやだと思った。自分の体のことは、人に決められるのではなく自分で決めておきたいからドナーカードを持つ。 ・長く生きられないのならあまり移植は意味がないと思っていたが、臓器移植を望んでいる人の置かれている状況を知って悩んでしまった。もう一度よく考えて答えを出したい。 ・自分は提供しても良いと思っているが、家族に反対されたらどうしよう。家族と話し合いたい。 ・いろんな立場の意見を聞いて悩んだ。自分で決めるためにはいろいろ知って考えることが大事だな。 	<p>供の意思について「もう一度自分だったらドナーになるか」という問いを行い意見をまとめるよう促す。</p> <p style="text-align: right;">◆イ</p> <p>◇提供する、しない、悩んでいる、の立場ごとに席を移動してまとめ、全体で意見交換を行う。発表を聞いて見直した自分の意見を、根拠をはっきりさせて発表したり、友だちの意見を聞いて自分の意見のふり返りができるように、発言の根拠に関わる資料を電子黒板に再提示するなどの支援をする。</p> <p>◇今までの学習をふり返って、考えたことをワークシートに記入するよう促す。</p> <p style="text-align: right;">◆イ</p>	1 本 時	
--	--	---	-------------	--

○ 評価計画

本単元では以下のように評価を行う。

評価の観点	「おおむね満足できる」状況(B)	努力を要する状況(C)と判断した生徒への指導	評価方法
ア 社会事象への 関心・意欲・ 態度	調査学習や話し合いに意欲的に参加し、臓器提供の意思の有無について自己決定しようとする。	・自分の家族、将来の妻(夫)、子どもがもし臓器を提供する(される)立場に立ったらどうかなど身近な人を例にして考えるよう促す。	発言、 つぶやき、 ワークシート
イ 社会的な思 考・判断	臓器提供のあり方についてドナー、提供者、家族の思い、医療現場などさまざまな立場から多面的、多角的に考察しながら自己決定しようとしている。	・友の考えを参考にするように促したり、違う立場だったらどうか対話しながらともに考えたりする。 ・発表でポイントになった資料を再度提示しながら参考になる資料を見つけることができるようにする。	発言、 ワークシート
ウ 資料活用の技 能・表現	臓器提供に関わる調査活動について、インターネットや資料集、新聞、聞き取り、アンケート等を用いて調査し、パワーポイントに自分の考えをまとめ、電子黒板を使って説明している。	・資料の見方や用語の説明を個別に指導し、まとめ方を例示する。 ・電子黒板を実際に操作しながら、効果的に見せる工夫をともに考える。	調査態度、発 言、パワーポ イント
エ 社会的事象に ついての知 識・理解	臓器移植について、臓器移植の仕組みや移植を取り巻くさまざまな考えを正しく理解している。	・机間指導で対話しながら知識の整理を行い、まとめることができるようにする。	発言、 ワークシート

5 本時案

(1) 主眼

臓器移植について調査してきた生徒が、電子黒板を使って調べてきたことを発表したり、自分とは異なる視点で調べてきた友の発表や考えを聞いたりすることを通して、自分だったらドナーになるか考え、新しい人権である自己決定権についての理解を深めることができる。

(2) 本時の位置

前時：臓器移植について調べてきたことを、電子黒板を使って発表し合った。(前半グループ)

(3) 指導上の留意点

- 意見交換の場面で発言や意見が滞りそうな場合には、机間指導であらかじめ生徒の意見を把握して指名計画を立てたり、考えさせたい資料を選んで電子黒板に提示したりして補助を行うようにする。

(4) 展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	◇指導 評価	時	備考
導入	1 グループごとに調査したテーマを確認する。	ア 自分たち以外のグループはどんなことを調べたのだろう。 イ 他のグループはどんなことを考えているのだろう。	◇ 各班の班長に、調査したテーマを挙げるようにする。 ◇ 前時の発表のページを刷りだして掲示する。	5	ワークシート
《学習問題》臓器移植の発表を聞いて、自分だったらドナーになるか考えよう					
展開	2 調査発表を聞く。(前時に引き続き、残りの班が発表) 3 発表を聞いての自分の考えを発表し合う。	ウ 日本では、脳死段階での臓器移植がまだとても少なかったな。 エ 臓器移植法が改正になって日本でも自分の意志や家族の意志での臓器提供ができるようになる。脳死段階での臓器移植が増えそうだ。 オ 臓器移植でしか生きられない人もいる。もし自分が移植を待つ患者だったらどう思うだろうか。 カ 自分の身近な人が、脳死になったとき、臓器を提供することが自分にできるだろうか。 キ 反対の意見について調べたグループの発表を聞いていたら、そういう考え方があったらと感じた。でも、臓器移植を待っている人が沢山いることを考えれば、やはり私は賛成かな。 ク 私は反対だったけど、世界的に見た臓器移植の状況や賛成の意見を聞いていたらどちらがいいのかわからなくなってきた。もう少し考えてみたい。	◇ 発表者には、電子黒板を有効に活用できるよう支援する。 ◇ 発表ごとに短時間の質問とまとめの時間をとり、友の発表を聞いての自分の考えを整理することができるようにする。 ◇ まとめた意見をもとに、席を移動して、全体で意見交換が行えるようにする。 ◇ 「どうしてそう考えたの」と問い返すことで、考えの根拠を明確にできるようにする。 ◇ 生徒の発言に関わっている資料を教師が電子黒板に提示しながら、効果的に活用する。	35	電子黒板
まとめ	4 今日の授業の感想を書きながら、本時の学習を振り返る。	ケ 友だちの発表を聞いて、臓器移植をめぐる状況がよくわかった。いろんな立場に立って考え、自分で判断していくことが大事なんだな。	◇ 本時を振り返りながらワークシートに感想を記入することで、自分の見方や考え方を深めることができるようにする。	10	ワークシート

			◇ 自分で判断していくときに どういう琴が必要なのか考え ながら感想を書くよう促す。	
		友の発表や考えを参考に、自分の見方や考え方を見つ め直し、自分の考えをワークシートに記入している。		

(5) 実証の観点

- ① 「もし、自分だったら」と自分によせて考えていったことは、臓器移植について、より身近に感じながら課題意識をもって追究するために有効であったか。
- ② 視聴覚機器を活用しながら、臓器移植について調べ習得した知識等をもとに、考えたことを説明したり、自分の考えを述べたり、意見交換をしたりする場を構想したことは、自分の見方や考え方を深めることに有効であったか。

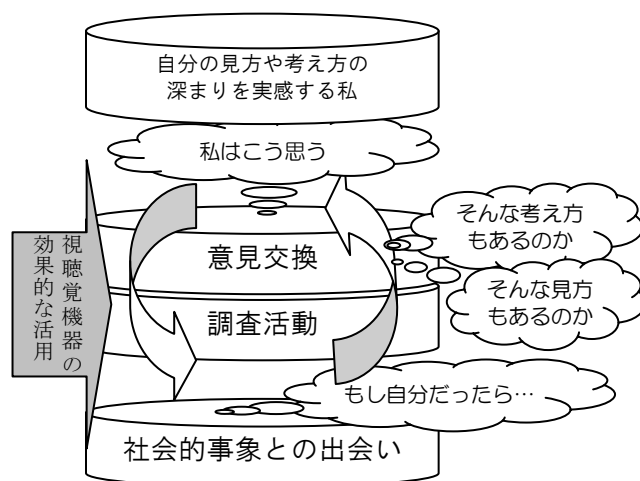
VI 研究内容

1 本時にかかわる視聴覚教材とその活用方法

前時までインターネットで調査活動を行い、パソコンを使って発表の準備をする。本時は、その調査活動の結果をワード、エクセル、パワーポイントなどを駆使してプレゼンテーションを行う。その際に電子黒板を使用する。

電子黒板の利点として、以下の点が考えられる。

- ・ たくさんの情報を次から次へと即座に発信することができる。
- ・ 少し前に示した情報を再度示したい場合に、容易にその情報を示すことができる。
- ・ 早く進めたい場合は早く進めることもでき、時間を有効に使うことができる。
- ・ スキャナカメラを使用し、補助教材や生徒がノートに書いたメモなどを提示する実物投影機としての役割を果たすことができる。
- ・ 部屋を暗くしなくても画面がよく見えるため、発表を聞きながらメモをとったりする活動ができる。
- ・ 拡大・縮小機能、文字を書いたり線を引いたりすることができる機能を使うことによって、自分が特に示したい部分を強調することができる。
- ・ ワード、エクセル、パワーポイントなどが使用できるということから、調査内容をコピーしたり、はりつけたりして短時間で自分の資料をまとめることができる。
- ・ 動画も映すことができるので、図やグラフだけでなく幅広い資料が活用できる。



本時、電子黒板を使用することで今までとは違った発表場面をつくることができ、友の電子黒板の利点を生かした発表を見たり聞いたりしていた生徒が、自らもっていた考えに立ち戻り、その考えを見つめ直すことで、自分の見方、考え方を広げたり深めたりすることができるのではないかと考えた。なお、発表の際、必要に応じて教師が電子黒板の操作を支援したり、教師自身も電子黒板を効果的に使いながら授業を展開することで生徒の追究を深めることができるようにしたい。

2 素材の教材化等

臓器移植に関わって、多くの生徒たちは、新聞やニュースなどのメディアを通して「臓器移植の話題を目にしたことがある」と答えている。

今年7月に臓器移植法の改正が行われ、15才未満の臓器についても、脳死後の提供が可能となり、本人の意志表示が不明な場合も家族の承諾があれば臓器提供が可能になった。そのため、脳死後本人が意

意思表示を行っていないとしても、家族の承諾によって臓器提供が行われるケースが増えており、昨今の新聞にぎわせている。

また、社会の動きとしてドナーカードの普及が進んでおり、日本全国の郵便局、都道府県庁、運転免許試験場、市町村役場、保健所、コンビニエンスストアなどで手に入れることができるようになっていくだけでなく、近年では保険証の裏に意思表示欄が設けられていたり、インターネットで意思表示することが可能になったりしている。

ドナーカードには、脳死判定に従い脳死後に臓器を提供する意思、心臓停止後に臓器を提供する意思、あるいは臓器提供をしない意思を表示することができる。生徒は、そのようなドナーカードをきっかけに、「もし自分だったらドナーになるか」について、単元を通して考えていく。自分が調査したことだけでなく友の調査結果や考えを聞くことを通して、多面的・多角的に考えることができるようになり、自分の見方や考え方を深めていくことができるだろう。また、「もし自分だったらどうするか」と自分によせて考えていくことで、自己決定権の大切さを感じたり、自分の生き方について責任をもって選択する意識が芽生えたりすることも期待できる。



【 1. 2. 3. いずれかの番号を○で囲んでください。】

1. 私は、**脳死後及び心臓が停止した死後のいずれでも**、移植の為に臓器を提供します。
2. 私は、**心臓が停止した死後に限り**、移植の為に臓器を提供します。
3. 私は、臓器を提供しません。


【 1 又は 2 を通した方で、提供したくない臓器があれば、Xをつけてください。】
【 心臓・肺・肝臓・腎臓・脾臓・小腸・眼球 】

〔特記欄：〕

署名年月日： _____ 年 _____ 月 _____ 日

本人署名(自筆)： _____

家族署名(自筆)： _____



3 単元に寄せた教材化

「臓器移植」の問題は、最近新聞やテレビで取り上げられることが多くなってきた。とはいえ、自分とは関係ないことであり、人ごとのようにとらえている生徒が多いだろう。そこで、この社会的事象を「ドナーカード」をきっかけに、考えていくことができるように授業構想する。

本単元では、生徒たちに本物のドナーカードを見せて、「もし、自分だったらドナーになりますか」という学習問題に直面させる。生徒たちは、まず直感や今まで習得している知識などをもとに、賛成か反対かを定めるだろう。そこで「ドナーカードとは」「臓器移植とは」という問いを解決するために調査活動を行い、追究を深めていく。調査する項目は、生徒に書かせる「調べてみたいこと」をもとに決めだしていくが、予想される項目は以下の通りである。

<調査させたい項目>

臓器移植法について	臓器移植にかかる費用	臓器が移植されるまでのながれ
臓器移植された人のその後の生活	移植を待つ人の思い	臓器提供に同意した人や家族の思い
自分以外の人(周囲)の意識	臓器提供に賛成する意見	臓器提供に反対する意見

生徒の意識をもとに、1項目3～4人程度のグループを編制し、調査項目にそって追究する。資料は、インターネットや書籍、聞き取り調査など、調査内容によってどのような方法が適切か考えるよう促したい。

生徒達は、インターネットや書籍等の身近で使いやすい手段から情報を見つけていこうとするだろう。項目によっては聞き取り調査やアンケート調査などが良い場合もあるので、教師の側からもグループごと個別に助言する。調査方法が決まることで意欲を持って資料探しにはいるだろう。

資料収集を行った生徒達は、発表にむけてまとめを作成する。パワーポイントに載せるデータや文章



を取捨選択し、しぼりこんでいく中で、自分たちの伝えたいことをはっきりさせていくことができるだろう。調査した内容を発表する場面では、電子黒板を利用して、多くの情報をその場で示しながら、その情報を根拠に考え出した意見を交換し合う。自分とは異なる視点で調査した友の発表を聞き、生徒はもう一度自分の考えにもどり考え始めるだろう。自分の気づかなかった視点や考えに触れることで臓器移植についての理解を深めたり、臓器移植の背景や問題点などに気づいたりしながら自分の考えを見つめ直し、自分の考えを広げたり深めたりすることができると思う。